二十七

壬子

同八月十四日
書了
三百五十九

栗葉

特別
へ5
6581
27

へ5
6581
25

八月十四日 [illegible] 初秀雄

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

〈98－40〉

雨中宿ゝ鶴鳴く萩の露 義白

月ゝ嶺の雲ともに消ゆ 仙加

朱樓ゝ古葉ゝ川音も物凄し 白

明方の窓ゝ集ふ雁 加

此後は日乗のゝ夕紛て 白

柿芋業ゝ饑免れしやる 加

六の時撞く鐘撞あとハ根笑く 白

一遠国ゝ二騎ある荒武者 白

弘行すゝ草鞋結ふ境の泊 加

蘇華さく十津川の里 加

萌出ゝ嫁に人の名ゝ呼て 白

東ゝ供ゝ方の後緑の讃 仰

待ゝ新め形ゝ迎えて 加

先達ゝ急ぐ平野ゝ千栗 加

紙ゝ銭の行衛し末の秋 一

僧しさかくれて寄り来感 一之

花諸列君子懲のち川ゝ鄰行ぬ　乙
太清ころも覚へから春　加
暮松めゝ親子連なる高野雲　、
竹ふる神代の詣てこそ　乙
ころふし山水り叢松灌ゑく　春水
被り終る乙郷まつ印　加
驚松寄ふ亭みたて金葉く　、
瀬松のゝ見近かり山雪　乙
け寺ゝ杼ちぬ経ゝ貨もの　、
要ゝ松引しゝず東方川車　加
傳りを又わを平気も取れらん　、
三代伴ゝ氏なる囲さ一　乙
信よ窓さ古き京かるゝぬ人　、
行かもえゝ藪さりの袖　水
立しぬ推ての営るよ爲とかゝ之　、
伸卯ゝり牛静かゝし　加

人陳氏書家紙の陳も力を好ぶ
性行れり小伝[illegible]
[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]

加
之
一
水

右

設[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

唯[illegible]

山[illegible]
[illegible]

仙郎

右

十五日 快晴 秋冷 [illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

かくしみなの浦の泊くに萩まさに今日道のはた行くに乙

さらに名をもたげてはの萩まりけるゝに古り来し春杉

たしかに松は何ぞ仲めかへにならはし

ゆの女秋をみつ之稲の苗と

妹へうつり仲秋の長嶋

ほうの十日もけふれしふ

萩寺てうらの頭よりて

旅の宿に涼しけれるに似

風雅乃道に涼しさ

山水を書しは出来うりに出茶茶　幽柳

秋ゆうを寂しは旅のみ身　仲め

月句

秋の十日の中の松乃月は寒し

露ふくと音てうら村の山き

月照もりつゝよみをとへすゝむ神ち

山吹乃にほふかさ花の影ろしに

野径のわたりこゝかしこ川辺の里の暮 沖女

仝

秋風に夕ぐれ川すゝきのなびき

棲山遠く結ぶ法の道しるべ 荊霞

秋深入日

紅葉ゞ柳も緑も川柳の雨に

も緑にしても柳ちるらむ 沖女

右

秋の葉の落ちゆく荊霞草に秋の日もつくる小湖之

すみ處も浅きをみれば一本なりしいつくしの葉のかたちも湖頭之

傾きにけり

さゝねしさ山ふもとの

庵の秋ゆかしてたてまく

二三年遠山つゞきて

又をしへ荊霞のもとに

仲よく住まひて

今年の日々をくらしぬ

めづらし杉山中の歌を

京とも

大江戸の流れや川との名　荊叢

萩の中新しくさそひ云の峯　似船

鶴織文々

柳川中ある色なき男の子

さなへ生えし兼知一本し

抄かや見える川乃その世　荊叢

又さかの乃たをさ乃一陣よ

右

折る夕顔の又あるく家ゆる者ゆりて口走明す

談らく枝ゆら鈴林息能子の名通荊叢うな

京の花鈴の一滴子の子あらく湖の人也大ささ

ゆるる花を花の音の年外弥とさや

鶴織文々

晴ゝ文華乃思ゆ人ち川ちゝ作　談京

今

春水

石

元春

佐加

荊貴

春水

佐加

義白

石

諸塢より

蓑乃雨も取乃人ぶ取もて記　　蕪村

こゝのらも法くに相々紀布乃宮

歩み降川乃南に馬を出ゝり陣也

鄒　小屋のあまりつゝ世為楽ハ

為此筆今いて述らぬ御書也

石

あもまつれも流し匹なみなるも之様所よりや紋

十六日　天気能　朝雪

今日は俳諧の席掛りに枕朝起をれ佛前御祝し誂豊

諸し拙き句も集め案析成り其後も述ぶるの名は為をとえ尓

ミゆ申上る我はの出す小ゆも出来の事也ありハ物のもゆ紀

或は関ひの書写とまてに見しお会ハ我の之かれて来り

聞にしかこ返ねも下され

○方座亭送　　方丈より

○南添一信　　誂重子
琴水子　より

○金毛虫

[illegible]

[illegible]

荊妻ゟ

[illegible]

也[illegible]

讀[illegible]

[illegible]

[illegible]

荊妻

今

[illegible]

[illegible]

仲女

石

[illegible]

[illegible]

[illegible]

こゝろよく始めし力勝強けに宇都く末も根つけて声か
まかせりし海の色ならぬ川原にて瀬ゝのかはりし
中し春雨あめては綿ふる夜ふ続ては長雨の枝株活かして
渕となりぬへし原

経終原わきえ記し　秋乃川　紀加

寒からぬ磨くらにし津もと荊茨のて返し川の水の原野
ふきぬ水のし姫紀たかりし庸きて流れも付け御幸
えりの雲西古川を流しかうとえの屋に陰し深く雨人居て

若から花深く吾すりまがりし渕し瀬終の橋まにえぬ錦物まて
川面の小屋にあつ上ああ往来は過くるたまき付け網笠くし
坂道をみぬけりし兼ねたる家まへ姫をのるとし駐まりし一息休まて
東陸　鈴乃二三四さも頭馴れし紀東客ともに宿西遊風情

竿下繋船　岸にも縛り鈴の跡　紀加

下りはいま始めてぬかれよいつまても知まし波のみ深に
こともてのそれもまた花絡ふく荒瀬の浅りに出ぬけりの借り
もなしき紀のこゝ船くの手よりて例しまれぬ

秋日中山家にて人々と会 らし 紹邸

ちかくの森に出て見かけ制りみち刻む虫の声に千織を

揃しるし節買代らぬ御邸〇居し 嵩山 占居にて言行

して大御所にて事あり工りて家女國の人と云ふにて遊ぶ大宗へ

頭の東西川くるにて[illegible]女ぬ例の書庵

おもふにそのひの都りとそれ此日事ありて人にそれ白大刀と

ひもとくにて学の[illegible]杉[illegible]桜をあに[illegible]

ぬるに[illegible]誤し一足下の[illegible]に〇何事を[illegible]

[illegible]高[illegible]行刻をうちて[illegible]の[illegible]

思ひの[illegible]ひとひ[illegible]遠くに[illegible]を

[illegible]わりて[illegible]

いさよひの[illegible]牛年乃月乃夜　紹邸

[illegible]人の[illegible]口母[illegible]の[illegible]人[illegible]

[illegible]人の[illegible]

[illegible]

月[illegible]

石出ねて天河の月出遊の松　紫加

猶ふく草りけもし

いよいよ月中　東風あり

み閑に東風遊びしぬ

十七日　朝雲

此都は山寺の跡にして入る陰をあはせ明神にて[illegible]

相[illegible]あはせ[illegible]仏あるへ[illegible]

[illegible]

深峯[illegible]之[illegible]

[illegible]

人の[illegible]

[illegible]

人の句とぞ

東来

仲秋[illegible]日[illegible]

青羊　　青藺

諸草乃中に風情多き花　吉扇

初ノ中ほのあかき庭に遊ふ

芦入や秋もさらに小山伏

情なるや月に清し枝に透る

右

空を言へる心にて今年仏は酒宴のみにてあらし

蓮の酒盛の時芙蓉草の如くなる

あるかなりと何し先酒を出しけれとも[illegible]

秋の草花にまさりし秋の哉　湖旭

草あれた庭をうかけし草哉　[illegible]

誠にも秋の花の草いとや人のおもしろき

けり秋も見しに御芙蓉草二所ありぬ余りて取尤

うれしき秋草の隠れをさねけれともいとしく[illegible]

乃哉根をも目にさし切草の[illegible]吉扇子の室

知れぬ寒き草の枝かくれなむとて[illegible]の

花をとし[illegible]芙蓉草[illegible]にも[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

十八日

一馬

[illegible]　井穂

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

小倉山こずえの月の秋の色の
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

右

[illegible]

[illegible]

[illegible]

右

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

右

右

右

廿日 快晴 [illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

海面や流れし秋の月
淀舟や山影ひかり秋の風
秋の月ゆゑ行くかぎりなく
秋立ちて草の葉の露
秋風や何か物ふる侘寝
右
寄り来るちぢの秋の花
夕小雨降りて秋の情

右
ふるさとの月見しかども隙の色
秋窓や東花枝ひかり
右
二月の会
立列
川面より春風吹かれ
春雨ふりて遠明り
右

[illegible]

石

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

正一日

天気晴　朝毛　拝殿　まゐて茶所

[illegible]

[illegible]

[illegible]

石上ふる雨ゆゑ紅葉の色
幡幡ふる山路の雪　明加
嚴明山樹の奥の雪　頓
雨の奥の紅葉の雨　頓
雨の中に入る中に紅葉
湖水ふる山路の雪　加
世の人の物思ひ立つ神路山

四方の人間の夏
長崎の奉行の国の乱　頓
狐塚の上の東郷の国　加
神路の山の西の別宮師の
雨ひふる雪の物思ひ　頓
秋の雨の紅葉の物思ひ
信濃の山の雪の雨　加
親の雪の信濃の雪

[illegible]り白ふく山[illegible]
皆人[illegible]
[illegible]
右

甚三

[illegible]
[illegible]
[illegible]

仍如

捷文

[illegible]
[illegible]
[illegible]

門ヶ藪ノ下醫者ノ橋ヲ出
タ月ヲ經テ江戸ノ所郷
所ヶ小路ノ所ノ
吉郎ヶ崎ノ濱ノ
明ケヤスク切ク
小笹ヶ藪ノ奉ノ中
ヲ蟹ノ蝶ヶ
右

加
丈
加
丈

其三

華ヶ崎ノ所ノ野ノ聲
秀ヶ崎ノ洞山ヶ間
萬夜月ヶ人ヶ行
ヶヶヶヶ燭ノ郷ヶ
所ノ雨蕭ノ郷ノ隆
稚ヶヶヶ伯ヶ
東南ヶ横川ヶ

加
加
加

[illegible]

蜀魂国に乃ぶやまん　加

国と一所と時なる空　乃

憂人の心の陳て[illegible]　加

如命無き[illegible]乃も　加

明るき[illegible]なのか　乃

洲鳴方に[illegible]　加

年来[illegible]人の世を[illegible]　乃

[illegible]

[illegible]

[illegible]

又たゝらの場所に集る
者共の姿を見て
若干の人間
張飛の奥庭厨の奥に
立き鍛冶の解説
鍛冶の者共と雑談
又新作の道具の紹介
番頭の新刀鑑定の
はゝ
加
中
加
中
加
中
はゝ
眉造り物の媚と
長さ二尺の
陸奥の東川
の来川
物語を打ち
刀の
加
中
加
中

校

校

校

校

十二日

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

廿三日

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

右

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

右

[illegible]

[illegible]

[illegible]

入京

楚宝

右

みい[illegible]

さらに

志風

[illegible]

右

俳諧之疑

正保三年六月十七日於[illegible]

右増山井北野[illegible]

新古今集

[illegible]

[illegible]

原之住[illegible]

右入用之品故移之[illegible]

[illegible]

[illegible]

○朝[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

出文

[illegible]

[illegible]

吉文

[illegible]

[illegible]